

## 編集者のための組版講座(第1回) 字間と行間をめぐる工夫の歴史 前田年昭

2022.9.7読書人

組版とは文字配列の技法であり、版面の姿は字間と行間によって決まる。

では字間と行間は何によって決まるのか。
個々人の好みなのか、天与の規範なのか。否、否。
近代の和文組版の基本の成立には、植字（組版）工たちの工夫の歴史、実践と経験の蓄積としての〈組版ルール〉があった。

歴史への視座がないところに、組版は成立しない。

## 金属活字伝来の衝撃

「……江戸時代までの印刷は、整版、活版（俗に一字板ともいった）を問わず、木版印刷であった。それが明治になって、やがて金属活字による印刷にとって代わられる。かくして、とって代わったスタイルは、江戸時代の人の眼には、さぞかし奇異に映ずる代物に違いない「漢字平仮名交じり文」である。これは、楷書の漢字と平仮名との結婚であった。ローマ字の場合には、1のようにのっぼな字体もあれば、mのように横に平べったい字体のものもある、bやdのようなものもあれば、pやqのようなものもある。これらのばらつきがあいよつてかもし出す

統一の視覚的效果とは違っても、旧来の『仮名交じり文』は、漢字に片仮名が、言わば、つつましやかに交じる様式であったから、彫り師の手になる一枚板の木版だった。幕末に西洋から金属活字が伝わり、活版印刷とともに、文字をひとつずつならべる植字（組版）の歴史がはじまった。

## 句読点の発明とベタ組みの定着

日本の印刷は近世まで整版であり、印刷物のハンコはもっぱら、彫り師の手になる一枚板の木版だった。幕末に西洋から金属活字が伝わり、活版印刷とともに、文字をひとつずつならべる植字（組版）の歴史がはじまった。

活版印刷では、モノとしての活字をならべて印刷物のハンコをこしらえる。ハンコはインキをつけて紙におしつけるわけだから、活字は裏返した状態で彫られたものであり、ひとつの字母は一つの版では一回しか使えない。同じ字でも使用頻度によって複数必要であり、さらに異なる文字サイズや書体ごとに文字セットが必要になる。文字と文字のあいだは基本的に詰めることはできず、込め物を入れてアケるか、字間をあけずにベタでならべるか、である。

植字（組版）工程は、文選（採字）、植字（組版）、解版に分かれていた。文選工が漢字や仮名を拾い、植字工がこれを版に組む。文選工は1時間に1300〜1400字拾ったという。「植えて」行き、行と行のアキにインテルを挟んで、四六判30字12行を1日（9時間）で32頁くらい組んだ〔石井研堂『少年工芸文庫』1904〕。

活版印刷の草創期、植字（組版）工たちは読みやすい組版の姿を求めて、苦闘しつづけた。

一例として、幸田露伴の小説でその変化をたどつてみる。『真西遊記』（1893年、学齢館、印刷・三井駒治東京印刷）は、四号字間四分アキで1行27字詰め1頁12行で、読点は字間の四

## 写植と行送りという考え方の成立

写植では組版工程が一変し、文字盤の文字をレンズを通して印刷紙に焼き付ける仕組みになった。タイプライターの印字をカメラに置き換えたものであり、文字を幻灯のように写し込むさまをイメージしてもらったらいいだろう。「物体」としての

し、また、平仮名に漢字の方を交ぜる場合には、漢字に楷書体は用いなかった。この長い伝統が、明治の印刷術によってうち破られた。漢字に仮名を交ぜるところから、日本の場合には、ローマ字における分かち書きの必要はさしてないにもせよ、仮名に一定の同じ大きさの号数（ポイント）の活字を許して文をまとめ上げるユニフォームは、視覚言語の流れのその律動感を殺ぐこといちじるしい。

明治に生まれた「漢字平仮名交用体」が、かの『古事記』がその方針として掲げた音訓交用体とまったく異なるのは、そこに、日本語のその内面からの要求にこたえるものとは何もないことである。言いうべくんば、舶来の印刷機械が、土着文化をまさに「機械的に」支配したのである。」

——亀井孝「日本語の歴史」〔日本列島の言語（言語学大辞典セレクション）三省堂、1997.1〕

分に入れられている。『風流仏』（1889年、吉岡書籍店、印刷・耕文社）は、五号字間二分アキで1行25字詰め1頁11行で、読点（黒ゴマ、白ゴマ）はアキの二分に入れられ、句点直後のみ1字アキとなっている。『枕頭山水』（1893年、博文館、印刷・杉原活版所）では、五号字間四分アキで1行30字詰め1頁13行で、読点はアキの四分に入れられ、句点に相当する読点は改行で区別されている。『不蔵庵物語』（1906年、橋南堂印刷・笈田活版所）は、五号四分アキで1行30字詰め1頁13行で、句読点は字間アキの四分に入れられ、句読点直後は1字アキとなっている。『小品十種』（1908年、成功雜誌社、印刷・秀英舎）は、五号四分アキで1行28字詰め1頁12行で、句読点は前同。『露伴叢書 前編・後編』（1909年、博文館、印刷・秀英舎）は、五号ベタ組みで1行44字詰め1頁14行で、句読点はそれぞれひと文字扱いとなっている〔以上、京都府立図書館所蔵〕。

こうして和文組版の基本としてベタ組みは定着した。四号、五号の字間二分アキあるいは四分アキから、五号、9ポイント、8ポイントのベタ組みへの変遷が示すとおりである。以後の『露伴全集』（1929年版、1949年版）はいずれもこの土台の踏襲であり、1960年代までには定型ともいえる円熟した組版様式がづくりあげられた。

書き手による文体の模索、受容する読者における文末意識の定着、植字工たちの半世紀にわたる工夫——まさに、句読点の発明とベタ組みの定着（「組版ルール」の成立）は、社会的な共有財産の結実であった。

## 活字の配列は、「空間処理」

に置き変わった。単一の文字盤からサイズの変更や変形も自在になり、ひとつの字母から、種類はレンズの組み合わせにより1000以上、回数も無限に使えるようになった。グーテンベルク以来の画期的な発明である。

文字は紙面のどこにでも自由に配置でき、ツメ組みも重ね組みもできるようになった。文選と植字は同じ人によって同時に行われることになり、解版の手間はいらぬ。採字は「一寸の巾」配列によってスピードアップされ、1日に1万数千から2万字になった〔筆安雅夫さんの証言〕。歯車によって位置を決めていく手動写植は組版を精緻にしたが、空間処理であるため個人差が生じやすく、また現像から乾燥までで仕上がりとなるため、濃度や寸法は不均一になりやすかった。

植字（組版）のもっとも大きな変化は、ひとつの行から次の行への移行が、活版では行と行の（アキ）にインテルを挟み込む作業だったものが、行のセンターラインから次の行のセンターラインへ（送る）作業に変わったことである。

電算写植は歯車をコンピュータの処理にゆだねたため、組版の理論はモノとして見ることはできず、定義した言葉で構成する、共通した組版ルールが必要になった。一例を挙げると、活版では「アキ（間）」しかなかった行と行との距離をあらわす言葉に、手動写植になって「送り」という言葉が加わった。しかし、写研の組み見本帳『写植NOW』（1972〜73年）の「行間○○H送り」という言葉には混乱があらわれており、1973年に出た『写真植字のための組版ルールブック』で、明確に「行間」と「行送り」に整理された。これは、浅野長雅（写研）、池田義則（ㄝ）、長谷川泰政（ㄝ）、柴田昭夫（モリサワ）、黒須寛（全関東写植協組）、日出島清司（ㄝ）という「6人の侍」が協力しあい、1年数か月のあいだ討議を重ねたも成果だった。

『組みNOW』（75年）では「行送り○○H」「行間○○Hアキ」と記されることとなる。

そして、現場の実践と経験は次々と、行頭行末禁則、分離分割禁止、字上げ字下げ、縦中横、振り分け、ルビ、同行見出し別行見出し、字取り行取り、などの言葉としてまとめられていく。これが写研の組版記述プログラムSAPC OL (SAPTON Composition Language)・HSを生みだし（行送り∥行の中心から中心までの送り、行間∥行と行のアキ）、

1990年代にJIS X 4051に結実する（字間は93年第1次規格、行間は95年第2次規格）。こうして金属活字の伝来から1世紀かかって、日本の植字（組版）は、言葉と論理を獲得した。まさに組版ルールは、集合知なのである。

この間の急激な変化はまた、組版の設計と施工の分担も変えていった。編集者の指定、指示を印刷会社あるいは写植組版者が施工するスタイルから、デザイナーの指定による組版者の作業へと変わっていった。DTPはこの動きを加速し、印刷会社が組版部門を外注下請け化したこともあって、工場における協業という組版の労働は、バラバラな個人（自営業者）による作業に置き換わっていった。一面では出版の自由の実現に近づいたともいえるが、他方で無手勝流による「自由」な組版が出てくるようになってきている。

<b>資料1</b>	
風流仏	1889.9
橘磯吉	耕文社（東京市京橋区弓町）
	18.7×12.6 五号 字間二分アキ 25字11行
<b>資料2</b>	
葉末集	1890.6
田口高朗	（東京市神田区今川小路三丁目一番地）
	*19.0×12.8 四号 字間四分アキ 25字12行
<b>資料3</b>	
露団々	1890.12
濱田巳助	
	*23.0×15.4 五号 字間四分アキ 38字15行
<b>資料4</b>	
虫のこゑ	1891
日置九郎	（大坂市日本橋区本町三丁目十七番地）
	*22cm 四号 字間四分アキ 36字14行
<b>資料5</b>	
真西遊記	1893.3
三井駒治	（東京市神田区錦町二丁目五番地）
	20.9×14.5 四号 字間四分アキ 27字12行
<b>資料6</b>	
枕頭山水	1893.9
杉原弁次郎	杉原活版所（京橋区元数寄屋町四丁目二番地）
	19.1×13.1 五号 字間四分アキ 30字13行
<b>資料7</b>	
不蔵庵物語	1906.12
佐藤助治	笈田活版所（東京市京橋区新富町）
	22.4×15.6 五号 字間四分アキ 30字13行
<b>資料8</b>	
小品十種	1908.6
飯村辰之助	株式会社秀英舎第一工場（東京市牛込区市ケ谷加賀町一丁目十二番地）
	22.6×15.8 五号 字間四分アキ 28字12行
<b>資料9</b>	
露伴叢書	1909.9
飯田三千太郎	株式会社秀英舎第一工場（東京市牛込区市ケ谷加賀町一丁目十二番地）
	22.8×16.3 五号 字間ベタ 44字14行
<b>資料10</b>	
露伴全集	1929-1930
守岡功	凸版印刷株式会社本所分工場（東京市本所区番場町四番地）
	*23cm 9ポイント 字間ベタ 45字15行
<b>資料11</b>	
露伴全集	1949-1958
精興舎	
	18.2×12.8 9ポイント 字間ベタ 45字15行
<b>資料A-1</b>	
Microsoft Word 2016	における行間、行送り
<b>資料A-2</b>	
Wordの行間についてのリクナビの解説記事	
	*は書誌からの計算による復元での「ほぼ原寸」、他は原寸。

### 歴史を知らないブック

32級行間24H行送り56H

### デザイナー